根 来 寺 坊 院 跡

広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査

1991年3月

和 歌 山 県 教 育 委 員 会

例　　言

1．本書は広域営農団地農道整備事業に伴う根来寺坊院跡発掘調査の国庫補助事業分の発掘調査概要である。

2．発掘調査は和歌山県教育委員会の指導の下、（財）和歌山県文化財センター技師 河内一浩、佐伯和也が担当した。

3．本調査は昭和63年度を河内が、平成元年度、２年度を佐伯が調査担当した。

4．本調査の遺構の略号、および遺物の番号は本文、実測図、写真図版に一致する。

5．本概報の作成作業は佐伯が担当した。

6．本概報の遺物実測図は1/3で、備前焼大甕は1/12である。遺物の写真図版は任意の大きさである。

7．本書で使用した遺構記号は下記のとおりである。

ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＥ　井戸

ＳＶ　石垣　　ＳＸ　地下式倉庫

目　　次

例　言

Ⅰ　調査および位置と環境……1

Ⅱ　ａ，第１次発掘調査……2

　　ｂ，第２次発掘調査……3

　　ｃ，第３次発掘調査……4

第３次発掘調査出土遺物実測図……5

出土遺物写真図版……6

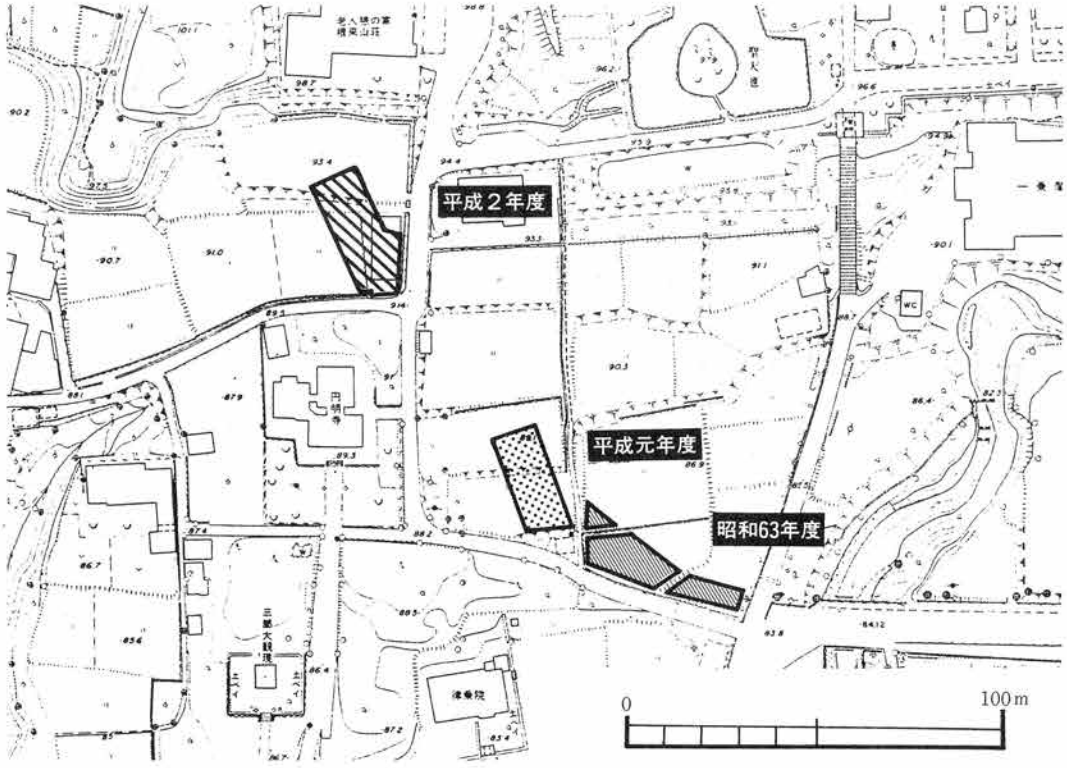
検出遺構写真図版……7

Ⅰ　調査および位置と環境

本調査は大規模農道整備事業に伴う根来寺坊院跡確認のためのものである。昭和63年度から平成２年度にわたり３ヵ年調査を実施した。各年度の面積は昭和63年度490㎡、平成元年度165㎡、平成２年度535㎡であり、総面積1,190㎡の発掘調査を実施した。

調査地（第１図）は大門の北東300ｍで、根来寺開祖の地、円明寺に隣接した農道予定地にあたり、現況は水田になっている。江戸時代の塔頭寺院の敷地を思わせる区画が現水田に反映している。

根来寺は、北は和泉山脈の一部である一乗山と南の前山に挟まれた谷間の要害の地である。あたかも城塞を思わせるような宗教寺院であり、開祖覚鑁が高野山金剛峯寺衆徒と仲たがいをおこし、保延六年（1140）に止住するようになり、新義真言宗の総本山としても知られている。また、この西方には坂本村があり門前町として栄え、淡路街道と大和街道から北上して和泉の国との交通の要衝でもある。天正の兵火（1585）として有名な秀吉の紀州根来攻めの折、それまで隆盛をほこっていた塔頭寺院の殆どが灰燼と化し、わずかに大伝法院の一画である大塔、大伝法堂が焼け残ったのみである。根来寺がいかに絶大なる軍事力と富を兼ね備えた寺院であったかは、ルイス・フロイスの「日本史」でも窺うことができる。



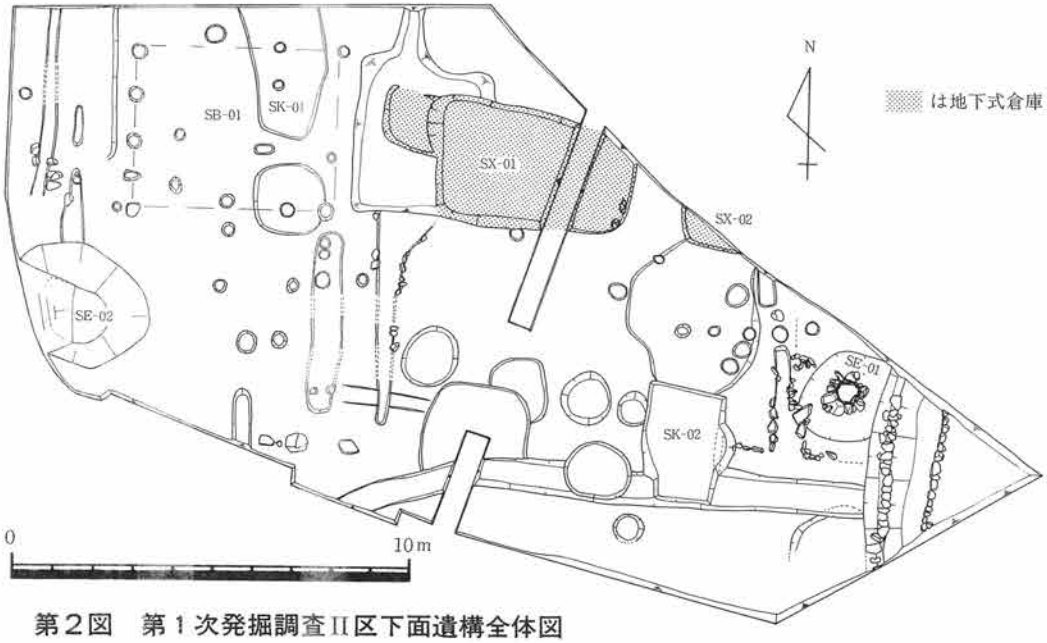
第１図　発掘調査位置図

II　a，第１次発掘調査の結果

調査対象地は、北から南にかけて高低差のある水田３枚にわたるため、調査区をＩ～Ⅲ区とした。

Ｉ区の検出遺構は天正の兵火時に係るもので、石垣、石組の溝２条、地下式倉庫１基を検出した。この地下式倉庫は南北2.6ｍ、東西4.5ｍ以上の規模をもつもので、北と南は石垣で画され、東と西は不明である。この石垣は内面に壁土を塗り込め、さらにその壁土を焼いたものである。この地下式倉庫からは、土師器の皿、中国製の白磁・青磁、備前焼、常滑焼等が出土している。

II区は江戸時代と天正の兵火にかかる時期の遺構面２面を検出した。上面の検出遺構は石組の溝４条、素掘りの溝５条、土坑３基である。下面（下図）の天正の兵火時に係る時期の遺構には地下式倉庫（SX-01･02）の２基がある。SX-01は東西約７ｍ、南北3.5ｍの規模で残存高80cmを呈する。埋土は全て炭混じりの焼土であった。また、この西方に貼り付くように進入路と思われる施設を確認した。SX-02は大部分が調査区外のため詳細は不明である。この両倉庫は東西に並び、その間隔は1.5ｍである。他の遺構としては溝、土坑、井戸、柱穴を検出した。SK-01からは備前焼大甕の破片が一個体分出土している。SK-02は南北３ｍ、東西２ｍの方形を呈し、北東隅で地鎮遺構と思われる土師器の皿が固まって出土した。井戸は２基検出した。SE-01は石組、SE-02は木組の構造であったと考えられる。出土遺物からSE-01は16世紀前半、SE-02は15世紀前半と思われる。調査区北西で掘立柱建物（SB-01）一棟を検出した。Ⅲ区は中世の土坑３基を検出した。いずれも不定形を呈し、出土遺物から15世紀代のものと思われる。



第２図　第１次発掘調査II区下面遺構全体図

b，第２次発掘調査の結果

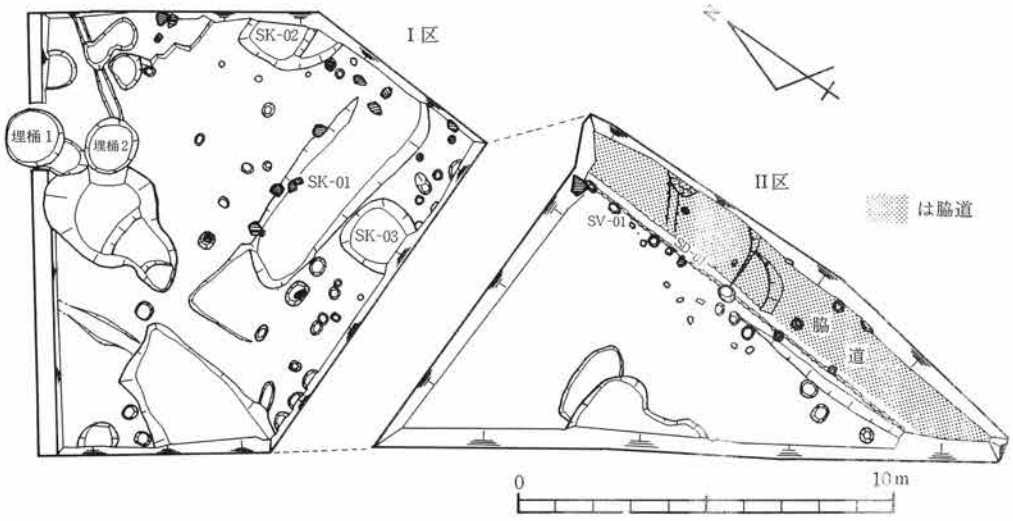
調査対象地は円明寺の東側に当たり、旧塔頭寺院敷地地割を残す水田２枚で、南に向かい雛壇状の傾斜する地形である。近世の復興時にかなりの削平をうけ、整地されているため中世の遺構の残存状態は良くなかった。検出遺構には土坑、礎石、石垣、溝、脇道などがある。

調査の便宜上、調査区の北側上段をＩ区、南側下段をII区と呼称する。

１．Ｉ区の遺構　上述のごとく、中世の遺構の残存状況は良好でなく、13世紀前半の土坑（SK-01）１基を検出したのみである。これは南北約２ｍ、東西約７ｍ、深さ約40cmを測る。ループあるいは平行線状の暗文を施した瓦器碗や、糸切底の土師器皿が大量に出土している。近世の遺構としては埋桶２基を検出し、それぞれの埋桶の埋土からは伊万里焼のくらわんか茶碗、唐津焼の碗、焙烙等が出土している。他の顕著な遺構としては、土坑（SK-01・02）がある。これらは意図的に瓦や墓石を投げ込んだものと思われる。

２．II区の遺構　Ｉ区調査区同様に近世の削平が著しく、中世の遺構は皆無で近世の遺構を検出しえたのみである。

石垣（SV-01）は南北に築かれたもので、塔頭寺院の敷地を画するものである。延長11ｍを検出し、土塀の基礎部分と考えられる。この東側に幅1.2ｍ以上の脇道が取り付き、SV-01と脇道の間には幅30cmの石組溝が設けられている。この溝（SD-03）からは伊万里焼碗、備前焼摺鉢、瓦片等が出土している。他に包含層から中国製の青磁・白磁・染付、瀬戸美濃系陶器、備前焼、常滑焼、土師質土器、瓦質土器、瓦等の中世の遺物も多量に出土している。



第３図　第２次発掘調査遺構全体図

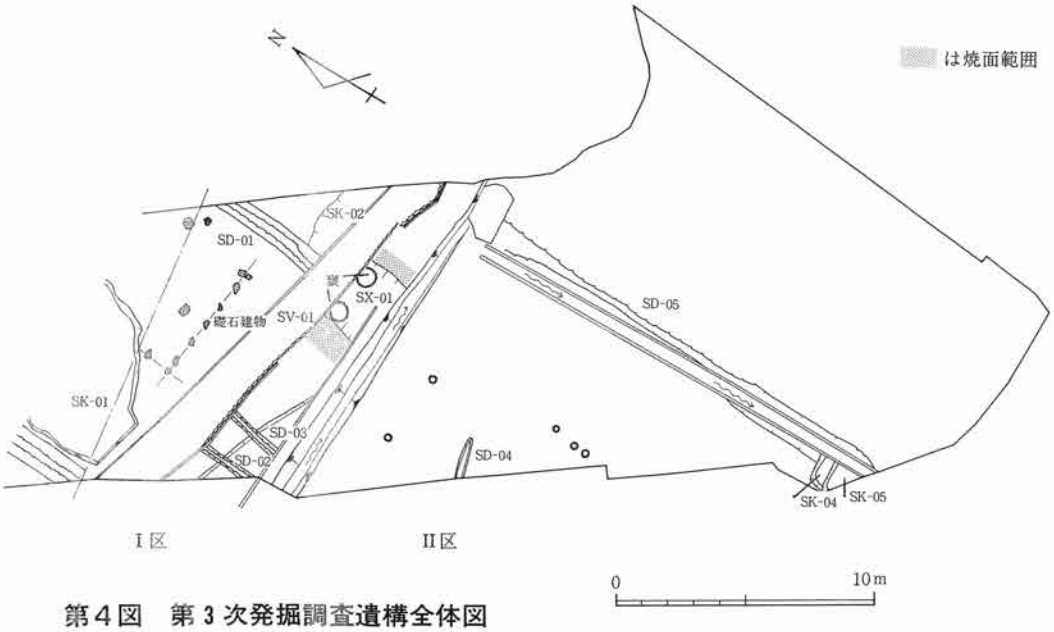
C，第３次発掘調査の結果

調査地は円明寺に隣接した北側に当たり、現況は水田になっている。江戸時代の塔頭寺院の区画が南北に雛壇状を呈し２段残っている。調査の便宜上近世の石垣（SV-01）で画し、Ⅰ区、Ⅱ区とした。天正の兵火時にかかる時期の遺構として、地下式倉庫１棟、礎石建物跡１棟、土坑２基、石組の溝２条等を検出した。近世の遺構は石組の溝２条を検出した。

調査区は非常に遺構の密度が希薄で、特に一段低い南部分は後世の削平が著しく、石組溝１条（SD-05）その他数個の径15～20cmの柱穴を検出したのみである。

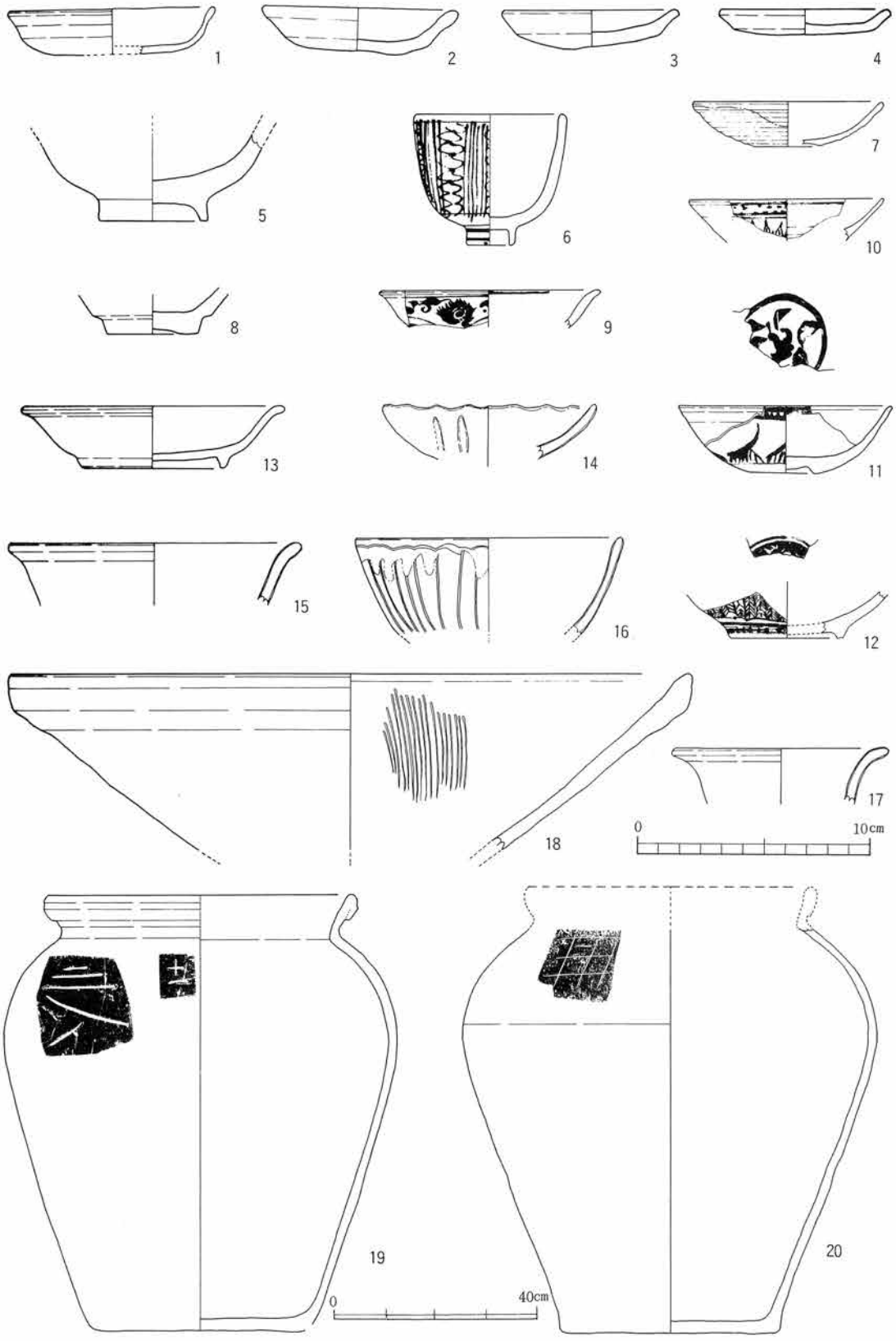
SK-01は６ｍ×５ｍの不定形を呈し、残存高約30cmである。これには多量の焼けた瓦が一括投棄されていた。礎石建物はお堂の南を巡る縁の束石なのか、建物のどの部分に当たるのか不明確である。今回検出した遺構の中で特筆すべきものは地下式倉庫（SX-01）である。この遺構の調査は水田の畦畔の関係で、南北の範囲は確認できなかったが、東西の長さ約３ｍの落ち込みの中に備前焼の大甕２個を据え付け、その両側の床面と思われる箇所が堅く焼け締まっている。また、その落ち込みの埋土は若干の色調、質の違いはあるが、すべて焼土で埋められていた。このような遺構はここ数年来、根来寺坊院跡の発掘調査において数例検出されているが、甕の内容物あるいは、このような遺構の用途についてはまだまだ不明な点が多く、今後の研究課題である。

出土遺物はごく少量で、包含層中からわずかに土師器の皿の破片が数点、中国製の白磁皿・青磁碗・香炉の破片、瀬戸美濃系の天目茶碗、伊万里焼、京焼、唐津焼の破片も数点出土した。



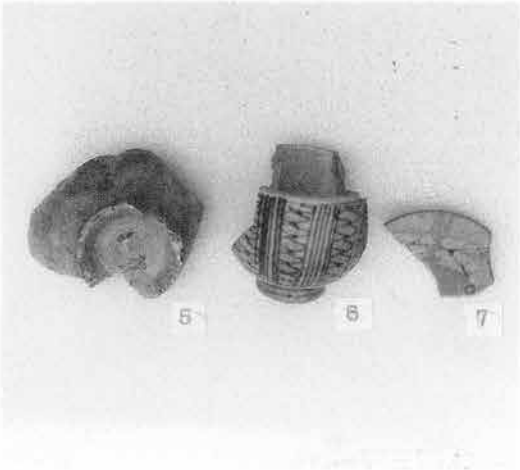
第４図　第３次発掘調査遺構全体図

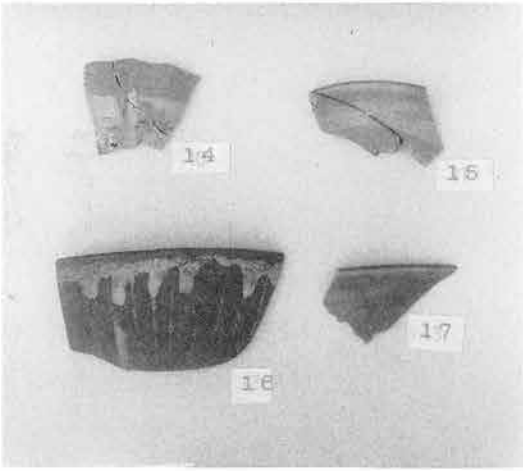
第５図　遺物実測図

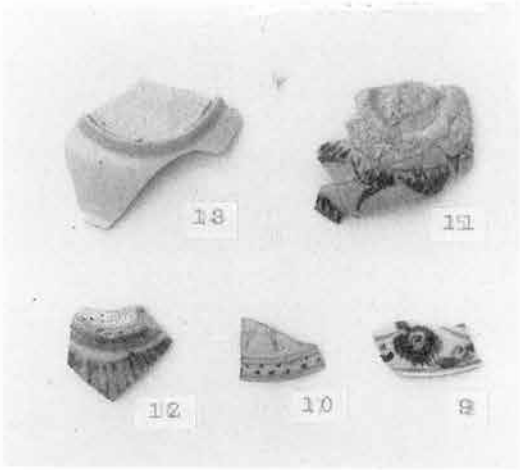


SK-01出土遺物1～4. Ⅰ区包含層出土遺物5.7.8.11.13.14.15.17.18 SX-01出土遺物16.19.20. Ⅱ区包含層出土遺物6.9.10.12.

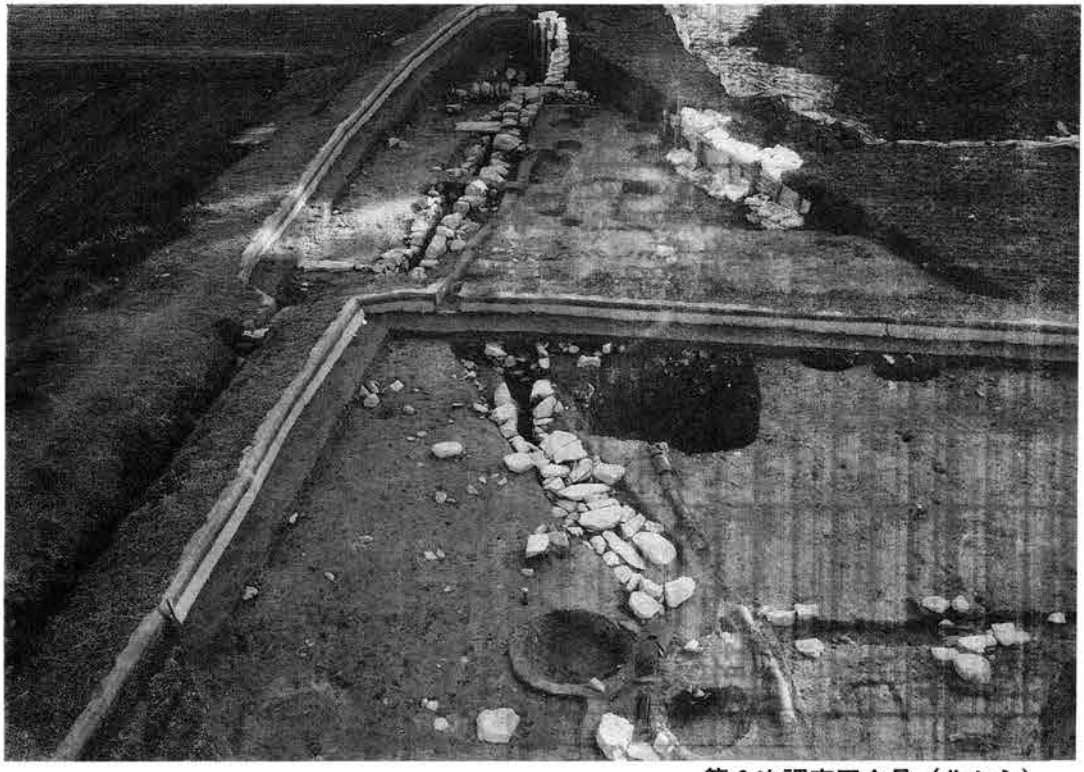
図版１　遺物写真







第１次調査区全景（東から）



第２次調査区全景（北から）

第３次調査区全景（南東から）

第３次調査区SK-03内 埋甕出土状況（南から）

根来寺坊院跡
広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査

平成3年3月

編集
発行　和歌山県教育委員会
印刷　有限会社 土屋総合印刷